ロールシャッハ・テストとTATの関係

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 由嗣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8468

〔原　著〕

ロールシャッハ・テストとTATの関係

高瀬　由嗣

要　約

本研究は、ロールシャッハ・テストとTATを実施した事例を通して、この２つの心理検査の関係について論じた。結果として、以下の３つの仮説が導き出された。（１）TATで貧しい反応を与える人は、ロールシャッハ・テストにおいて特異な人間反応を与える傾向がある。換言するならば、ロールシャッハ人間反応とTAT反応はいずれも同じもの、すなわち被検者の対象表象を表している。つまり、これらの反応は、対人関係における個人の経験の質を反映するものである。（２）TAT反応の質は言語性IQと密接な関係があるが、ロールシャッハ反応の形態質と言語性IQとの関係はほとんどない。（３）TATの課題は被験者に多くの制約を課すのに対して、ロールシャッハ・テストはそのような制約を与えない。この仮説に基づいて、２つの心理検査の性質を理解するための提言を行なった。

キーワード：ロールシャッハ・テスト、TAT、対象表象

ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと略）と主題統覚検査（Thematic Apperception Test：以下、TATと略）は、いずれも投映法の代表的な検査である。周知のとおり、この２つの検査は、臨床心理学の概論書には必ずといっていいほど取り上げられている。また、近年、米国で実施された大規模な調査によれば、ロ・テストとTATは、夥しい種類の心理検査の中でも、いずれもその使用頻度は10位以内にあり、臨床場面ではいまだに根強い人気があることが示されている（Camara, Nathan, & Puente, 2000）。

この２つの心理検査を有効に活用するためには、互いの関係を事前によく理解しておく必要があるのは言うまでもない。すなわち、両者はパーソナリティのどのような側面を査定し得るのか、また、どのような点で共通し、どのような点で異なるのかといったことである。特に投映法検査は、被検者にかかる負担はもちろんのこと、検査者にとっても、その分析・解釈には多大な労力を要する。それゆえ、このことをよく理解しておかないと、被検者、検査者の双方にとって「労多くして功少なし」という事態を招くことにもなりかねない。

ところで、ロ・テストとTATとの関係を直接に問題にした研究は意外なほど少ない。この問題について触れた文献の中では比較的古く、またもっともよく知られているのが1949年に発表されたシュナイドマンの図（田中、1996）ということになるであろう。この図では、ロ・テスト、TAT、人格目録という三者の関係が潜水艦、船、

飛行機にたとえられ、ロ・テストには被検者の無意識および前意識の水準が、TATには前意識および意識の水準が表れやすいことが示されている。言い換えるならば、ロ・テストには人格のより深い部分（潜水艦）が、TATには比較的浅い部分（船）が表出されるというのである。これは、２つの検査についてきわめて興味深い視点を提供するものであり、現在においては半ば通説のようになっているものであるが、経験的なデータに基づいてこれを実証した研究は残念ながらほとんど見当たらない。

また、本邦においては、鈴木（2002）が、両検査を実施した２つの事例の分析と解釈を通して、この問題について論じている。鈴木（1997）も述べているとおり、TAT反応とは、各々の図版の刺激に基づいて構成された物語であるため、これを全図版に共通する統一的なスコアで表現するには相当の困難が伴う。よしんばTAT反応のスコア化に成功したとしても、それをまったく質の異なるロールシャッハ・スコアと単純に比較する訳にはいかない。それゆえ、２つの検査の関係を検討するためには、スコアに基づいた量的な研究よりも、鈴木が示したような、両検査の分析と解釈を主体とした事例研究の積み重ねこそが適切な接近法であると考えられるのである。

さて、臨床場面においてこの２つの検査を実施していると、きわめて興味深い現象に出合うことがある。それは、どちらか一方の検査では比較的良好な反応を与えておきながら、もう一方では、これとはまったく逆に不良な反応が多発するケースが存在することである。つまり、一方の検査結果から、もう一方のそれをまったく予想し得ないようなケースである。仮に良好な反応を与えうることを「成功」、不良な反応しか与ええぬことを「失敗」と定義するならば、どちらの検査に「成功」し、どちらの検査に「失敗」するかは、被検者の個性に大きく依存していることは疑いようがない。したがって、「成功」と「失敗」の差の著しいケースを、２つの検査以外の情報も取り入れながら詳細に検討するならば、どのような人がロ・テストにうまく対処し、どのような人がTATのような課題を得意とするかが見えてくる筈である。それは、取りも直さず両検査の特徴を浮き彫りにすることにつながる。それゆえ、この接近法は、鈴木の正攻法とはまた違った形で、２つの投映法検査の関係性を考えるための突破口となるであろう。

そこで、本研究では、ロ・テストに成功し、TATに失敗した事例、およびロ・テストに失敗し、TATに成功した事例を取り上げて、この２つの検査の関係性を検討することを目的とする。なお、ここでいう成功・失敗とは、集団内における相対的な評価ではなく、飽くまでも個人内における反応の質の著しい差異を意味することを予め強調しておく。

Ⅰ　ロ・テスト成功、TAT失敗のケース（事例Ａ）

Ⅰ－１　臨床像

Ａ氏。検査時、50歳代前半の男性。検査時に被検者自身から得た情報によると、彼は定職につかず、酒に溺れる毎日を過ごしていたという。ある時、「お前は勇気のない人間だ。本当に勇気ある人間だったらヤクザと戦え」という声が聞こえてきた。そこで、彼は実際に暴力団の事務所に出向き、「ヤクザと戦う」が、暴力団員に殴打され事務所を摘み出された。また、ある時は「お前なんか車に轢かれて死んでしまえ」という声が聞こえ、実際に路上に大の字になって寝ていたこともあった。そんなある時、「悪いことをやって、警察に

捕まってしまえ」と聞こえたため、彼はこの声に従って他家の窓ガラスを割ったという。

心理検査は、病理水準の査定を主な目的として、ロ・テスト、TAT、ウェクスラー式知能検査改訂版（以下、WAIS-R）の３種類が施行された。ロ・テストは片口法（片口、1987）に依拠した。検査時、A氏は「イライラする」とか「こんなの（各種検査）を受けたら頭がおかしくなる」などと言い、なかなか検査に注意を集中できないようであった。この時に行なった知能検査の結果は、言語性IQが65、動作性IQが52、全検査IQが55であった。表１には、彼のロールシャッハ反応およびスコアを、表２にはTAT反応を示した。なお、表には、特に重要と思われる箇所のみを記載した。

表１．A氏のロールシャッハ反応とスコア

Ⅰ．１．コウモリに見える。
［〈コウモリはどこに？〉これ羽。…これ胴体。…これが頭ですわ。〈どんなところがコウモリらしく見えましたか？〉ここですね（「羽」の部分を指す）。ＷＦ ± ＡＰ］
２．カブト虫みたいに見える。…こんなこと言っていいんですか？〈どうぞご自由に〉
［〈カブト虫？〉ここ。ここだけ。〈もうちょっと詳しく〉これ頭。下は胴体。…〈どんなところがカブト虫らしい？〉ここがツノ。ツノがあるから。ＤＦ ± Ａ］

Ⅱ．１．ネ、ネズミかあ…
［〈ネズミ？〉（人間の平凡反応とまったく同じ領域を指で囲む。また、ネズミは両側に見えたのではなく、片側のみである）…これが頭に見える。胴体はここ。足はこれ。〈ネズミらしい特徴は？〉いちばん初めにこれが顔に見えて…顔です。ＤＦ ∓ Ａ］
２．人間に見えたり…分からん…
［〈人間？〉（この反応も先のネズミと同じく、片側のみ指で囲む）…足と胴体と頭ですわ。…ここは手。手出しとる人ですわ。〈人間らしいのはどんなところ？〉手出しとる格好が人間らしい。ＤＭ ± Ｈ (P)］

Ⅲ．２．足がカッパみたい…。
［〈足がカッパみたい？〉ここ。この爪先、カッパみたい。…〈足と爪先だけ？〉顔も見えるね。口元がとんがってるみたい。足は人間に見えない。爪先がとんがってるから。でも顔は人間に見えるね。〈カッパについてもうちょっと詳しく〉頭、胴体、手はこれだね。（結局、この反応も片方のカッパについてのみ説明し、向かい側のカッパにはまったく言及せず）ＤＦ ± (H)］

Ⅳ．１．ゴリラみたい…分かりません。
［全体。…〈詳しく〉頭で、手で、胴体…〈どんなところがゴリラっぽい？〉頭とか手とか…ＷＦ ± Ａ］

Ⅴ．１．あ…あれみたいだな…タカ…タカ…タカかカラスに見える。…分かりません。
［〈タカかカラス？〉羽と足ですかねえ。〈特にタカとかカラスに見えたのはどんなところ？〉羽だね。羽をバーッと広げたところに見える。ＷＦＭ ± Ａ］

Ⅵ．１．ギターに見える…分かりません。
［〈ギター？〉全体的に…〈どんなところがギターっぽい？〉…これ。〈それは何？〉巻くところ。ＷＦ ± Music］

Ⅹ．１．クモに見える。
［これ（Ｄ１）ですわ。…足がダーッといっぱいあるからクモらしい。ＤＦ ± Ａ］
２．あと人間に見えるし…。
［これ（D14）ですわ。双子みたいに見える。これが頭で、これが胴体で、これが足ですわ。それでこれがケツに見える。手を後にバーッと上げとるように見える。…〈人間のように見えたのは？〉…ケツとか足とかの感じから。ＤＭ ± Ｈ］

（主要スコア）
Ｒ＝14、Rej（Fail）＝１、Ｗ＝６、Ｄ＝８、Ｆ＝10、Ｍ＝２、FM＝１、ΣＣ＝０、Ｒ＋％＝79%、Ｈ%＝21%、Ａ%＝50%、Ｐ＝２、Content Range＝５、Determinant Range＝４

表2．A氏のTAT反応

Card 1
（被検者は、図版を受け取って「分からない」という言葉をしきりに繰り返す。約3分が経過し、検査者が〈どんなことが思い浮かびますか？〉と問いかけると、彼は、TATの課題とは無関係に自らの妄想様の体験を語り始める。）…〈この人（少年）、どういう人なんでしょう？〉……何か考え事しとるんですよ。…〈うん。どんな考え事？〉いろんなこと考えとる。…（中略）…僕だったら昔のことばかりを考えてる。…ああすれば良かった。こうすれば良かったって。…〈この人、幾つぐらい？〉5、6歳だね。…これ、なんですか？（被検者、ヴァイオリンを指す）〈ご自由に考えてください〉…まあ、人のことは分からんわ。

Card 8BM
腹ついたると思って…〈ん？〉腹ついたると思って…腹切るんじゃない？……この人なに？（被検者、前景の人物を指す）〈自由に考えてみて〉看護婦さんかねー…〈なんで腹ついたると思ってる？〉…怠けもんやで…怠けもんやで…〈この人（後景、横たわる人物）なに？　もうちょっと詳しく教えて〉酒飲みの…酒飲みの人でしょ。…〈じゃ、この人（後景のメス持つ人）は？〉この人、みな友達でしょ。…〈なんで友達の腹をつこうと思ったんでしょうね？〉知りません。

Card 14　18″－1′20″
穴ん中ですね。〈ん？〉穴ん中です。〈穴？〉はい。……〈もうちょっと詳しく教えて。どんな穴ん中？〉…穴ん中ですわ。どう見ても……〈その他に何かありますか？〉ありません。

Card 15　20″－2′20″
お墓の中…悪いことをしたで謝ってます。…娘さんですね。〈娘さん？〉はい。…〈幾つぐらいの娘さん？〉22、3の…〈どんな悪いことをしたんでしょう？〉…酒でも盗ったんでしょ。

Card 20
全然わかりません。何がなんだか…全然、何がなんだか、さっぱり分からん。全然…俺もこういうとこ逃げたことある。〈ん？〉逃げたことある。亡霊に追いかけられて、声だけ聞こえて。…〈どういうところ？〉草むらのところ。こっちに来い、こっちに来いって言われて。酒おごったるでこっちに来いって言われて…喜んでついていった…だけど姿があらへん。

Ⅰ－2　事例Aの考察

はじめに被検者A氏が、ロ・テストにどのような形で成功したのか、そしてTATにどのような形で失敗したのか、ということについて明らかにしておかなければならない。ロ・テストにおいて筆者がまず注目したのは、その形態水準である。なぜなら形態水準は、被検者の現実吟味力、自己統制の程度をはっきりと示すものであり、精神病理の査定には、第一にこれをチェックしておく必要があるからである。A氏の場合は全般に形態水準が良く、全反応中に良形態の反応が占める率は、78.4％である。また、思考障害を反映するとされる逸脱言語表現も皆無である。このロールシャッハ結果を、特に形式面から見る限りでは、A氏に重篤な精神障害を推定することはできない。その意味で、A氏はロ・テストを無難にこなしたと言える。一方、この被検者をTAT失敗の例として取り上げたのは、彼が、健康な成人が一般に与える物語のテーマから明らかに逸脱した反応を多く与えていることによる。つまり、A氏の反応は図版に描かれた人物の性別や年齢など、一般に出現するものと異なるものが多いのである。それは彼が図版の刺激を正確に認知できていないことを意味している。また、なかには図版の刺激からかけ

離れて、了解し難い妄想的内容を語っているものもある。これらを総合し、この被検者をTAT失敗の例として取り上げたのである。

この被検者の特徴について、両検査の結果をもう少し掘り下げて検討したい。ロ・テストにおいてA氏の与えた反応内容を詳細に検討してみると、スコアの形式的分析だけでは十分に分からなかった特異な面が見いだされる。それは人間反応に現われている。そこで、まずⅡ図版の人間反応に注目したい。A氏の与えた答えは一見すると平凡反応のようであるが、これは厳密に言うと平凡反応ではない。なぜなら、彼は一人の人間についてしか言及していないからである。片口（1987）によると、Ⅱ図版の人間は図版の全領域あるいは“Cut off W”の領域を以てはじめて平凡反応となりうる。また、実際に健康な成人における出現頻度を調べてみると、Ⅱ図版における人間反応は2者像であることが圧倒的に多い（高瀬、2006）。これらのことに鑑みると、人間像を1人分しかみていないA氏の答えはきわめて特異と言わざるを得ない。2人の人間について言及し、なおかつ両者に何らかの「相互作用（interaction）」（たとえば、二人で手を合わせている、向かい合って踊っているなど）を感知できるのは、人間に対する関心があってはじめて成り立つ（高瀬、1999）ことを考えるならば、A氏にはそのような関心がきわめて乏しいことが推測されるのである。

さらに、このⅡ図版で注目すべきは、この人間反応に先立って、まったく同じ領域に「ネズミ」という反応が与えられていることである。「ネズミ」と「人間」が同じ領域に続けざまに与えられるというこの特異な現象を敢えて大胆に解釈するならば、それは「非人間化（dehumanization）」（Mayman, 1977）の現象ということもできる。つまり、A氏にとって、人間の大きさは、ときにネズミと同程度にまで矮小化される可能性があるということである。それほどまでに人間は、彼にとっては大きな存在ではないのかもしれない。

続くⅢ図版の「カッパ」という非現実的な人間反応も、これに類する反応と見てよい。すなわち、純粋な人間反応を与えることができず、しかも2匹ではなく、1匹のカッパであるところが、この被検者の最大の特徴と言えるのである。多くの人が人間を見るところに「カッパ」という、非現実的な人間像を与えることは、先に述べた非人間化の現象を裏づけるものであり、これは彼が人間を生き生きとした感情や人格をもったものとして見做していないことを意味している。また、X図版では「双子」という、かろうじて二人の人間を見た反応が出現するが、相変わらず両者の相互作用については言及されていない。シンメトリーの人間像を「双子」とするのは、きわめて素朴な反応であって、人間どうしの関係に関する深い洞察は欠けているのである。

ここでロ・テスト結果をまとめると、A氏の問題は主に人間反応に現われているようである。つまり、彼は人間に対する関心がきわめて薄く、ときとして人間の価値を著しく低める可能性も考えられる。したがって他者との関係性のありようもきわめて浅薄であることが推測できるのである。

次にTATに目を転じたい。TATの図版は、白紙図版を含めた4枚の図版を除いて、すべてに人物が描かれている。しかもTATの図版はロ・テストのように偶然できあがったものとは違い、どの図版も何らかの意図をもって描かれている。したがって被検者は常に図版の意図、つまり図版の要請するものを読み取らねばならない。言い換えると、被検者は図版に描かれた人物の性別や年齢、

あるいは表情などを推測したうえで、人物とモノ、あるいは人物どうしを関係づけて物語を構成することが要求されるのである。ここで注目しなければならないのは、人物の外観からその内面を推測する能力、そして人物の相互関係を読み取る能力は、人間に対するある程度の関心、そして人間関係に関するある程度の繊細さを必要とすることである。したがって、良い人間関係を築きあげるための大前提となる、健全な親子関係を体験してこなかった人や、ある種の精神病理によって対人関係に関する関心を失ってしまった人は、TATという課題に失敗しやすいと考えられる。A氏の場合、彼の生育歴に関する詳しい情報は入手し得なかったが、TATとロ・テストの反応を総合して考えると、そのどちらにも該当する人のように思われる。

さて、ここで1つの仮説を提示したい。それは、TATで失敗する人はロ・テストにおける人間反応のあり方が特異である、ということである。少なくとも筆者の経験では、ほぼ例外なくこの仮説が当てはまる。その理由として考えられるのは、人物が描かれたTAT図版に与えられる反応とロ・テストの人間反応は、その根底において共通のものを表現しているということである。それは、人間に対する関心の程度、他者との関係性のあり方、さらには自己および他者イメージなどである。もちろん、反応の現われ方は、両検査の課題の性質の違い（つまり刺激から物語を構成するか、何かを連想するかの違い）によって表面的にはずいぶん異なって見える。しかしながら、本質的に両者が表すものは、いずれも被検者が内的に抱く「対象表象(object representation)」(Blatt, Brenneis, Schimek, & Glick, 1976 ; Urist, 1977 ; Ursit & Shill, 1982; Blatt, & Lerner, 1983) ということになるのであろう。

ところで、TAT反応とロールシャッハ人間反応との共通性は、鈴木（2002）の研究にも認められるものである。彼は、両者の共通性を認めたうえで、さらに「単純で鮮やかなイメージを与えてくれるのはロールシャッハ・テストの方で、詳しく微妙なところまで教えてくれるのはTATの方である」(p.195) と述べている。ここからも明らかなように、両検査に表現された「人間」像は、見かけ上は異なっていても、その根底では繋がっているのである。

さらに、TATの性質についてもう1つ付け加えておかなければならない。言うまでもなく、TATにおいては常に図版に描かれた刺激全体をざっと観察し、全体を構成することが要求される。つまり、良いTAT反応とは、ロ・テスト風に言うならば、良く構成された全体反応を意味するのである。さて、このような良い反応を生み出すためには、全体を正確に認知し、かつそれを総合する言語能力が備わっていないと難しい。筆者は、この能力は、ウェクスラー式知能検査におけるIQ、特に言語性IQと深い関係があるのではないかと考えている。必ずしも統計的な検討を行なった訳ではないが、筆者のこれまでの経験を振り返ってみると、言語性IQが高い人は、TATという課題を比較的無難にこなす傾向が見いだされるし、逆に、言語性IQの低い人、特に70点未満の人は、TATに失敗しやすいという傾向も見受けられる。A氏の場合も、WAIS-Rの結果や、検査の合間に彼と交わした雑談から、言語の理解力やコミュニケーションの能力にやや問題があることが推測された。実は、このことは彼のロールシャッハ反応にも現われている。それは、Ⅲ図版の自由連想段階において、彼が「足がカッパみたい」と

答えている点である。ここで彼は、「カッパ」の全体像には言及せず、あたかもその全体像は自明のことであるがごとく反応している。つまり検査者に対して、自分の見たものを正確に伝えていないのである。これは彼のコミュニケーション能力の低さを示すものと言えるであろう。

一方、ロ・テストの形態質（R＋％）と言語性IQとの関係は、TATにみられるものほど強固なものではないと考えられる。なぜなら、ロ・テストは、図版のどこに何を見ても自由なのであって、必ずしも、全体を構成する必要はないからである。事実、形態水準の良い部分反応（D領域反応）を多く与えるという比較的楽な方法によって全体の形態水準が上がる人もいる。A氏もこのタイプに属する。

以上、A氏の検査結果を総合すると、彼は、人間や人間関係に関する興味や関心がきわめて薄い人であること、さらに慢性的な過度の飲酒によって精神病に近い状態にあり、幻聴や妄想に支配された生活を送っていたことが分かる。内面が妄想で支配され、また外界の人間関係に関心の薄い人が、TAT図版に描かれた刺激を正確に認知することができず、病的な反応を与えることは決して稀ではない。したがって、このケースでは、図版中の刺激として、人間がより直接的に表現されたTATの方に被検者の病理性がよく現われたと言うことができよう。

Ⅱ　TAT成功、ロ・テスト失敗のケース（事例B）

Ⅱ－1　臨床像

B氏。検査時、20歳代後半の男性。B氏が中学生の頃、両親は離婚し、B氏は父親に引き取られて養育された。高校に入ってしばらくして、素行のことで生徒指導部から注意を受けたり、学費を滞納しがちであったりしたため自ら退学した。その後は、露天商や鉄筋工など職を点々とした。10代の後半、彼は友人の運転するオートバイの後部座席に乗って車と衝突するという事故に遭い、頭部を損傷した。この損傷が原因で、一時的に意識が朦朧とする外傷性のてんかん発作らしき症状が現われ始めた。たとえば、煙草に火をつけたまま発作を起こし、気がつくと指に火傷を負っていたこともあったし、また、トイレに入って下着を脱いだ直後に発作に見舞われ、用を足すことをまったく忘れていたこともあった。

このケースにおいて心理検査を実施した目的は、B氏のパーソナリティ特徴とともに脳の損傷によってもたらされた精神症状の程度を査定することであった。WAIS-Rの結果は、言語性IQが98、動作性IQが104、全検査IQが100であった。表3には、B氏のロールシャッハ反応およびスコアを、表4にはTAT反応を示した。

表3．B氏のロールシャッハ反応とスコア

Ⅰ．1．パッとみたら顔だね。人間じゃないような…爬虫類
[これがツノみたい。トリケラトプスみたいな。それで、なんか怒った顔みたい。パッとみて、そういうふうに見た。爬虫類といっても、四足の爬虫類だよ。エリマキトカゲみたいなさあ。〈爬虫類っぽいのはどんなとこ？〉形が角張って、ギザギザみたいだから。W、S M± (Ad)]

2．(付加反応)
[今、思いついたのを言ってもいい？〈どうぞ〉中国の王冠みたい。古い時代の三国志みたいな。楊貴妃とかそういうのに出てくるような。ギンギラしてたでしょ、中国のは。パッと見て形がね。ここに頭が入るような、上の方の形もね。〈ギンギラ？〉この小さい部分が宝石がちりばめられているように見えた。このツノは王の象徴。W F干 Obj]

Ⅲ．1．人と人がケンカしてるようだね。
[頭、足…ケンカというよりはボクシング。これ（D3）がグローブ。〈ボクシングしてるように見えたのは？〉人と人が向き合ってるように見えたから。…（中略）…〈グローブに見えたのは？〉さほど理由はないんだけど… W M干 H、Obj P]

2．裏返したら違ったように見える。人と人がそっぽ向いてる。
[これが顔。女性。そっぽ向いてるというかダンスしてるみたい。ブロードウェーのさあ。足をポンと上に上げてる。〈ダンスしてるように見えたのは？〉格好がそうだから。下（D1）は説明つかん。足かなあ。お客さん にテープ投げられたとか。そんなことないわねー(笑)。やっぱり足だな。ライトが他のところ向いてるから暗いんじゃないかな。ステージのオープニング。W M ± FC' H

Ⅷ．1．おお、カラーだなあ！…何か木が燃えてるようにしか見えんなあ。杉が何かかなあ。
[これが杉のてっぺん。下の部分が火。火が覆ってる。…なぜか知らんが、そのように見えた。実際に山火事を見たわけじゃないけど。…この絵は一本だけの杉だけど、実際はもっと沢山の木が燃えてるような…（以下、略）。 W CF干m Fire、Pl]

Ⅸ．1．逆さまにしたら、派手な舞台衣裳みたいに見えるんだけどねー。
[下がズボンかスカート。ピンクのところは肩。緑のところは部分は名前は知らんけど、肩のところから胴をこういう感じで覆うヤツ（ゼスチャー）。 W FC干 Cg]

Ⅹ．1．これは花火だなあ。花火大会みたい。
[花火は見た通りカラフルだから。花火にしか見えん。 W CF干m Fire、Expl]

3．あとは完全に想像なんだけど、煙突から火を噴いてる事故。緑が木。青が消防車が水をかけてる。こういう小っちゃいのは、小鳥みたいな小さな動物が飛びかって逃げまくってる。森の中がパニック。石油が燃えてるような煙だから。水をかけても消えるわけないけどね。
[この煙、赤の部分が石油が燃えてるように見えた。でも、あんなところに小鳥がいるわけないしね。だからまったく想像です。 W CF干m、KF、FM Fire、Smoke、A]

(主要スコア)
R＝24、Rej＝0、W％＝100％、F＝6、M＝4.5、FM＝3.5、ΣC＝7.25、FC:CF＋C＝0:7.5、R＋％＝33.3％、H％＝21％、A％＝25％、P＝4、Content Range＝11、Determinant Range＝9

表4．A氏のTAT反応

Card 1　33"－3'45"

これはヴァイオリンですね、これ。これ壊れてるわけじゃないでしょ。これ。〈それは自由に…〉ああ。…これは将来ヴァイオリン弾きになりたいんじゃないですかね、この人。だけど、手に入れたいんだけど高いもんだから…これは、親父か誰かのヤツじゃないですかね。だから触るわけにもいかないっちゅうやつじゃないですかね。これはね。怒られるもんだから。だけどヴァイオリンやりたいしっていう…〈これから先は？〉あっ将来ですか。やっぱり親父がやってたかどうかは分からんけど、やっぱりヴァイオリン弾きになりたいんじゃないかねえ。…だけど、普通の家庭じゃヴァイオリンなんか習えんもんね。ま、たまたまこの子は運がよく、お金持ちって言ったらアレだけど、音楽家のとこに生まれたもんだから…目指すんじゃないかな。

Card 6BM　19"－1'30"

これは親子だね。…で、息子がお袋さんに会いに来たんじゃないかな。…〈というと離れ離れに生活してる？〉と思う。帽子なんか持ってるし、コートなんか着てるし。だけどお袋さんが何かの理由でそっぽ向いてるんじゃない。勝手に家出てって、今更って感じじゃないかな。…で、多分この人（「息子」）は成功してさ、どっかで、家庭円満ちゅうか、家族とかもいてさ…他の土地でね…で、何十年か経ってパッと出てきたんじゃないかな。でパッと見たら、親父ももう死んでて、お袋ひとりだったとかさあ。…そんな感じじゃないかな。

Card 8BM　10"－2'00"

うーん、これは何か意味深なシーンだな、これ。これはヤバいんじゃない？…（10"）…ああ、そうでもないか。これ、ライフルでしょ？〈それは自由に〉ライフルですわね、勿論。…で、多分この人は何かのアレで、戦争か何かで撃たれたんですわね。で、手術っちゅうか、弾を出してもらってるんじゃないですかね。で、その時に手当てがうまかったもんだから助かって、こんだけ立派になれたってアレなんじゃないかな（前景の人物を指す）。…だから医者じゃ何かじゃないかな、この２人は（後景のメス持つ人たち）。…違うかな…で、今でも現役で、何か軍隊じゃないけど、ああいう警察とかああいうのやってんじゃないかな、保安官か何かを…〈この人（前景）が？〉うん。有名になっちゃって。

Card 20　8"－1'25"

これ雪の日にさあ、夜中かな…夜中に…街路灯ですわね、これね。街路灯のところに背もたれみたいな感じで立っとる…帰還兵って言ったらいいかな、ああいう感じじゃないのかなあ。仕事もないし、カネもないし。よく言うじゃない。名誉、戦争の名誉はあっても生活とかああいうのは関係ないもんね。…もと英雄でさあ、〈もと英雄〉うん、話作っちゃうとね（笑）。もと英雄だけど、国に帰ってきたら、そっちのけで…変な目で見られちゃうとかさあ、ランボーみたいな、ああいう感じじゃないの？

Ⅱ－2　事例Bの考察

このケースに関しても、先程と同じように、ふたつの検査において、どのように成功し、どのように失敗したかをまず定義しておく。TATにおいてB氏の与えた反応は、一般的な健康な成人の反応から大きくはずれたものはない。つまり、どの反応もいわゆる一般的なものばかりである。言語の用い方はややくどく、中には反応失敗に近いものも2つほどあるが、全体を通して、物語の構成は概ね適切であり、少なくとも了解不能の反応はひとつもない。このことは、彼がTATという課題を無難にこなしたことを意味している。一方、ロ・テストは形態質が全般に悪く、R＋％は33.3％ときわめて低い。その形態水準の低下は特に色彩反応において顕著であることが、プロトコルから読み取れる。

このケースについても、両検査の結果を簡単に振り返ってみる。まず、B氏がTATに成功した理由について考えてみたい。これを完全に明らかにすることはできないが、おそらく、その理由の一つとして、彼の言語性IQが比較的高いことが影響していると考えられる。すなわち言語性の知能の高さが、TATという課題を成功せしめたと言うことができるのである。これは、先に述べた仮説と一致するものである。

しかしながら、IQが高ければ、どのような環境下におかれても、現実をよりよく理解し、適切な対処行動がとれるという訳ではない。なぜなら、IQが、すべての知的行動を決定する要因では決してないからである。事実、B氏の場合も、TATに関しては比較的無難にこなすことができたが、ロ・テストに関しては決して適切に対処し得た訳ではない。それでは、なぜ、同じ投映法である両テストにおいてこのような現象が生じるのであろうか。このことについて、2つの検査の課題そのものが被検者に与える制約という観点から考えたい。というのは、検査における反応の質を議論する際には、まずは課題の性質を考慮する必要があると思われるからである。

ロ・テストでは、被検者は図版のどこに何を見ても自由である。また、場合によっては、図版を逆向きに見ても構わないし、インクのシミがないところに何かを見ても一向に差し支えない。「自由反応」という言葉が示す通り、ロ・テストの反応は基本的に自由度が高いのである。一方、TATでは、どの図版も逆さにすることは許されない。常に与えられた位置で図版を見、図版全体の刺激をできる限り取り入れて物語を作ることが要求される。しかも、先にも述べた通り、物語を作る際には、描かれている人物やモノがまず何かを同定し、人物の行動や人物間の関係を推論することが言外に求められている。Murstein (1964) によれば、TATの課題には、少なくとも「絵に描かれているのは誰か」「その人物は何をしているのか」「なぜそうしているのか」、そして「結末はどうなるのか」という4つの側面が暗に含まれており、被検者はこれらの1つ1つをクリアしていかねばならないということになる。つまり、TATの課題そのものは被検者への要求が多く、また、被検者の勝手なやり方を許さないという意味で制約がきついのに対し、ロ・テストはもう少し、被検者の勝手さ、自由さを許容し得る検査であると言える。この点から考えると両検査には大きな隔たりがある。

それでは、これらの検査を受ける人の側に焦点を当てるならば、どのようなことが言えるのであろうか。ある限定された枠組みの中で、その能力をいかんなく発揮できる人もいれば、より曖昧な

状況下でこそ能力を発揮できる人もいるのではないだろうか。言い換えるならば、あらかじめ与えられた素材を料理すること（例えば、フィギュアスケートやシンクロナイズド・スイミングなどにおける「規定演技」のようなもの）が得意な人もいれば、より曖昧で自由な状況の中から何かを探したり創ったりすること（上の例でいえば「自由演技」のようなもの）が得意な人もいるのである。課題が与える制約という観点で言うならば、この２つの状況は、TATとロ・テストという２つの課題に臨む状況とよく似ているのではないだろうか。

ところで、非常に興味深いことであるが、人は不得意な課題に直面している時こそ、そのパーソナリティのさまざまな側面が浮き彫りにされると思われるのである。俗に「人は窮地に立たされた時に本性を現す」などと表現されることがしばしばあるが、この言葉は、あるいは心理査定の領域にも当てはまるのかもしれない。

さて、B氏の場合は、どちらかと言うと、限定された枠組みの中で能力を発揮し得る人であると思われる。なぜなら、彼は、あらかじめ答えの決まっているWAIS-Rや、課題の制約の厳しいTATにうまく対処できたからである。しかし、彼はより曖昧な状況では混乱しやすい人のようである。なぜならロ・テストでは全般に良い形態を見いだし得ず、特に色彩刺激に翻弄されたからである。

ここで、B氏のパーソナリティについて簡単に述べておきたい。彼のパーソナリティの問題は、おそらく彼が不得意とする課題－ロ・テストに現われた。まずは、衝動統制の問題である。「山火事」（Ⅷ図版）、「花火大会」、「煙突から火を噴いている事故…水をかけても消えるわけない…」（いずれもⅩ図版）などは、B氏が色彩に圧倒され、自己統制を失っていることを意味する。つまり、B氏はロ・テストの色彩刺激に揺さぶられてこのように反応の質を低下させたのであって、それは彼の自我の弱さを如実に示すものである。さらに、「火」がすべてのものを燃やし尽くすという、破壊的な内容に注目するならば、B氏の攻撃衝動の凄まじさが見て取れる。Ⅲ図版の「人と人がケンカしてる」という人間運動反応の内容も、この攻撃衝動を裏付けるものとみてよいであろう。

この被検者のもうひとつの大きな特徴はその演技性・虚飾性にある。たとえば、「中国の王冠。…宝石がちりばめられてる…」（Ⅰ図版付加反応）、「ブロードウェーのステージのオープニング」（Ⅲ図版）、「派手な舞台衣裳」（Ⅸ図版）などの内容や反応語を見ると、相当に虚栄心の強い人柄がうかがわれる。すなわち、彼は、派手な言動によって、周囲の注目を自分にひきつける傾向があると考えられるのである。さらにⅠ図版の「トリケラトプス…エリマキトカゲ」や「三国志…楊貴妃」、またⅤ図版の一連の反応語に注目するならば、彼はあらん限りの知識を検査者に誇示しているようである。これらのペダントリーも、ある意味で、B氏の虚飾性をよく表していると言えよう。

これらを総合すると、ある種のヒステリー人格が疑われる。ところで、これらのパーソナリティの問題が、まったくTATに現われていない訳ではない。「ランボー」や「ジョン・ウェイン」（9BM図版で出現）など映画や映画俳優に関する言及がいくつかあることを考えれば、ここにも彼の演技性や虚飾性が現われていると言える。しかしながら、彼の場合は、ロ・テストというより曖昧な状況下で、自由に連想し、自由に語ったことによって、そのパーソナリティ特徴がより顕著に現われたのである。このケースは、課題そのものが持つ

制約の強いTATでは必ずしも明らかにできなかったパーソナリティ特徴を、より自由で曖昧な課題であるロ・テストが検出し得た良い例と言うことができよう。

Ⅲ　まとめ

最後に、この２つの事例を振り返り、それぞれの検査の解釈、そしてそれを基に行なった考察から導きだされた幾つかの仮説を簡単にまとめておきたい。

第一の仮説は、TATで失敗しやすい人は、ロ・テストの人間反応が特異である、ということである。さらに単純に言うならば、そのような人は純粋な人間の平凡反応が著しく少ないか、あるいは、１つもない場合が多い。また人間どうしの相互作用もきわめて希薄である。このことから、両者は根源的には同じものを表しているものと考えられた。つまり、被検者が人間関係の中で体験する、自己と他者のあり方、そしてその関係の質（換言するならば、対象表象）がここに表現され得るのである。ここから一歩すすめて言えることは、ロ・テストを解釈する際には、人間平凡反応の有無、そしてその内容と系列に焦点を当てることがきわめて重要であるということである。そこに思わぬ問題や病理が潜んでいる可能性が高いし、また、逆に、そこに健康的な側面を見いだすことができるかもしれない。

第二の仮説は、TAT反応の質の善し悪しと、言語性IQとの関係は深い、ということである。図版の刺激全体を総合して、物語を構成するというTATの課題は、多分に推理力や理解力、コミュニケーション能力といった言語的な知能を必要とするのである。一方、ロ・テストにおける反応の質（R＋％）と言語性IQとの関係は、TATにみられるものほど強くはないと言える。

第三の仮説は、TATとロ・テストは、その課題そのものが持つ制約という観点から眺めるならば、大きな違いがある、ということである。それゆえ、一方のテストで良好な反応を与えておきながら、もう一方のテストで崩れることは決して稀なことではない。そして、崩れた方にこそ、パーソナリティのさまざまな側面や病理が現われると考えられるのである。それゆえに、この２つの投映法検査を組み合わせて用いることは、被検者をより多面的に、そしてより深く理解するために、きわめて効果的であることを最後に強調しておきたい。

文　献

Blatt, S., Brenneis, C., Schimek, J. & Glick, M (1976) Normal development and psychological impairment of the concept of the object on Rorschach. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 364-373.

Blatt, S. & Lerner, H. (1983) The psychological assessment of object representation. *Journal of Personality Assessment*, 47 (1), 7-28.

Camara, W. J., Nathan, J. S., & Puente, A. E. (2000). Psychological test usage: Implications in professional psychology. *Professional Psychology: Research and Practice*, 31, 141-154.

片口安史（1987）改訂　新・心理診断法 金子書房.

Mayman, M. (1977) A multi-dimensional view of the Rorschach movement response. In: *Rorschach Psychology*, ed. M. Rickers-Ovsiankina. Huntington, NY: Krieger,. 229-250.

Murstein, B. I. (1964) A normative study of TAT ambiguity. *Journal of Projective Techniques &*

Personality Assessment, 28. 210-218.

鈴木睦夫（1997）TATの世界 —物語分析の実際. 誠信書房.

鈴木睦夫（2002）TAT —絵解き試しの人間関係論. 誠信書房.

高瀬由嗣（1999）ロールシャッハ人間反応と精神病理. ロールシャッハ法研究3, 24-36.

高瀬由嗣（2006）ロールシャッハ・テスト記録のデータベース構築, 平成16～17年度科学研究費補助金（基盤研究(c)）研究成果報告書.

田中富士夫（1996）査定情報の総合と伝達（田中富士夫編著.〔新版〕臨床心理学概説, 第6章, 北樹出版, 82-91）.

Urist, J. (1977) The Rorschach test and the assessment of object relations, Journal of *Personality Assessment*, 41 (1), 3-9.

Urist, J. & Shill, M. (1982) Validity of the Rorschach mutuality of autonomy scale, *Journal of Personality Assessment*, 46 (5). 450-454.

The Relationship between the Rorschach and TAT

Yuji TAKASE

ABSTRACT

This study discussed the relationship between the Rorschach and TAT through analyzing the cases in which the subjects were administered these two psychological tests. As a result, three following hypotheses were made. (1) A subject giving poor responses in TAT tends to give deviant human responses in the Rorschach. In other words, both Rorschach human responses and TAT responses would represent same thing, that is, subject's object representation. These responses ought to reflect the quality of individual's experience within interpersonal relationships. (2) Although the quality of TAT responses has close relationship to the verbal IQ, there is little relationship between the form quality of the Rorschach responses and the verbal IQ. (3) While the TAT task imposes a considerable restriction on subjects, the Rorschach task does not put such a restriction. Suggestions were made to understand the properties of two psychological tests based on these hypotheses.

Key Words: the Rorschach, TAT, object representation